

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	五月十九日江津川のつどひによめる文：文苑
Author(s)	下山，陸治
Citation	龍南會雜誌， 28： 54 - 55
Issue date	1894-06-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4419">http://hdl.handle.net/2298/4419</a>
Right	

なきものゝぞありける。うが中に、月花を弄ぶあはれをのべ、戀路をたどる心ばへを、ものしたるあはれは、さほどあらねど、つるぎをふみ、矢丸をけりても、ものどもせず、大君の邊にこそ死なめど、をたけびしつるころ、いとやんごどあかりけれ。さるを、こは亡國の音など、あげつらひひがむるは、全くいひかひあき、しりうごとなめり。そは、遠き國の文天祥、あるは方孝孺などの詩を、さだめしついでにや、いひけさんとは、したりけん。うもろもおのが身を、あきものにして、明治の御代を開き初めしあれば、うの潔きこと、雪を冑して、さきいつる梅の花の、春をえまたずして、風にちりまがどとし。あはれあはれとは、よのつねのことにて、いはんかたなく悲しきことの、あたらしきことにこそあなれ。こをよまん人、このいきざしをもて、いきざしとせば、たゞに世の亂に處するよすがとあるのみならず、けだし、よるづのことよあたりて、成らざるはあらざらん。うゝれば、志をたて、國を興す基といひつべければ、編める人の心さへゆかしうて、一言をかくなむ。

## 五月十九日江津川のつどひによめる文

下山陸治

けふこゝに、我同級の友監督の師と共にうちつどひて、親睦會を開きぬ。若葉の綠玄たたりて、木の間もりくる風もすすしく、まして、同じ人々のつどひあれば、江津川の水の心もいさぎよく、苦學れいぶかしさも、今ははや、一時にあらひるゝげる心地ぞすある。まかはあれど、豈た、この比の景色に、心をあぐさむるのみあらんや。うれ、古

の歌に、

世の中は樂しきものは思ふとちたなし心をかたるありけり  
とぞよめるにあらずや。あはれ、かたみに思ふ人のうちとけて、同じ心を語るより、樂  
まきことは世にあらずや。さても我等の世に生れいつる、先父母にはぐみ養  
はれ、夫れより年をへて、世の中の事わざに處するよ至る迄、いとも重んずべきは師  
友の間がらにあらずや。師友の感化は即第二の父母ともいふべきをや。我いゝある  
幸をえてか、この師を仰ぎ、又この友をわけてむつびぬ。願くは、ゆく末あかく問ひつ  
教られつ、學の業を勵みあひ、はてはうごきなき御世の固めども、あらむ人の數にも  
いりたゝんころ、あらまほしけれ。」

末あかくにこらぬ江津の水の面をかはらぬ友の鏡とや見む

西省漫詠（承前）

教授 笠間 梧園

一谷懷古

懸軍如飛鳥雄搏下自天、疾勢不得支、諸平  
敗、爭船慘憺、鼓聲死、旗暗落日邊、回首茫茫、  
八百歲、唯見興亡、輕於煙、依然鏡、楞峰頭月、  
今日誰、吊九郎骨。

舟中夢沼田珂陽

偶爾相逢拍我肩、分明盃酒笑欣然、半宵夢  
破、茫無跡、身在須摩萬里船。

夜過壇浦

已過三十六長灘、山轉海回亦壯觀、今古蒼  
茫、見殘月、興衰遷轉付、顏瀾萬乘天子魂、何  
在、一世姦雄骨、已寒颯々海風吹髮去、悲歌  
長嘯倚船欄。